

阿口の遺産



杉さくらの杜育てて観る会

本誌は、『北房町史』『阿口を訪ねて』を中心に、その他の記録、聞き覚えのある口伝を記述している。

目次

○阿口のマップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

全体、杉、境、草谷、原茂

○地名のおこり・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

○杉地区の遺産・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

阿口小学校、金倉神社、才の神、大正田、竜王山の鉱業、清明塚、岩屋の穴、雄岩、雌岩、亥の子まつり、杉さくらの杜、顔なし地蔵、丹月様、稻荷様、四面地蔵、岩屋の穴のお大師さま、地神、芋岡のミサキ、旧阿口老人憩いの家近くのミサキ、九郎坂

○境地区の遺産・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

薬王寺、大山様、山上様、のぶよし荒神、のりさだ荒神、こびたな荒神、観音様、ミサキ、天皇様、庚申様

○草谷地区の遺産・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

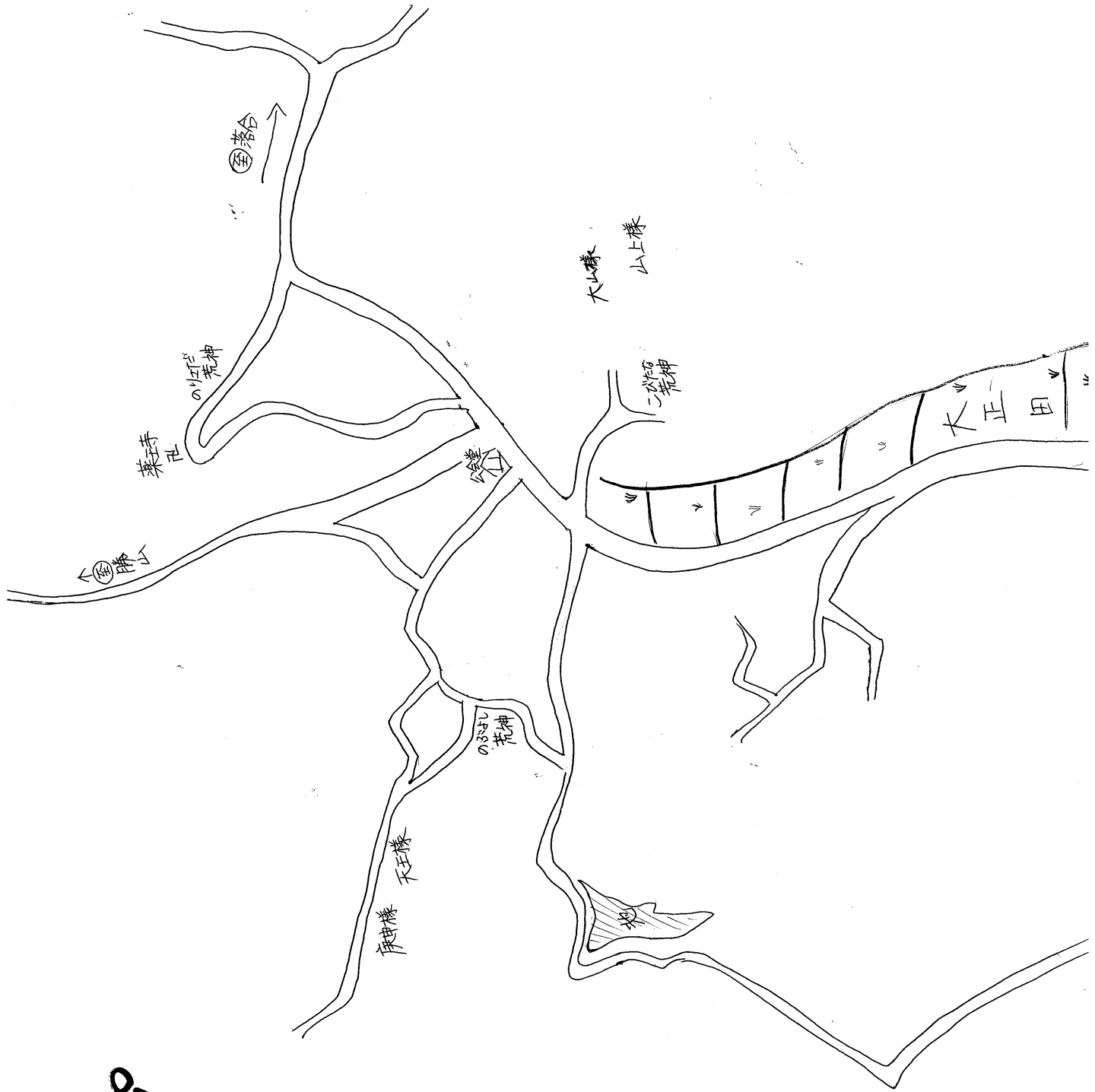
阿口神社、むねとう荒神、地神、高鶴部城に水を送った御井出

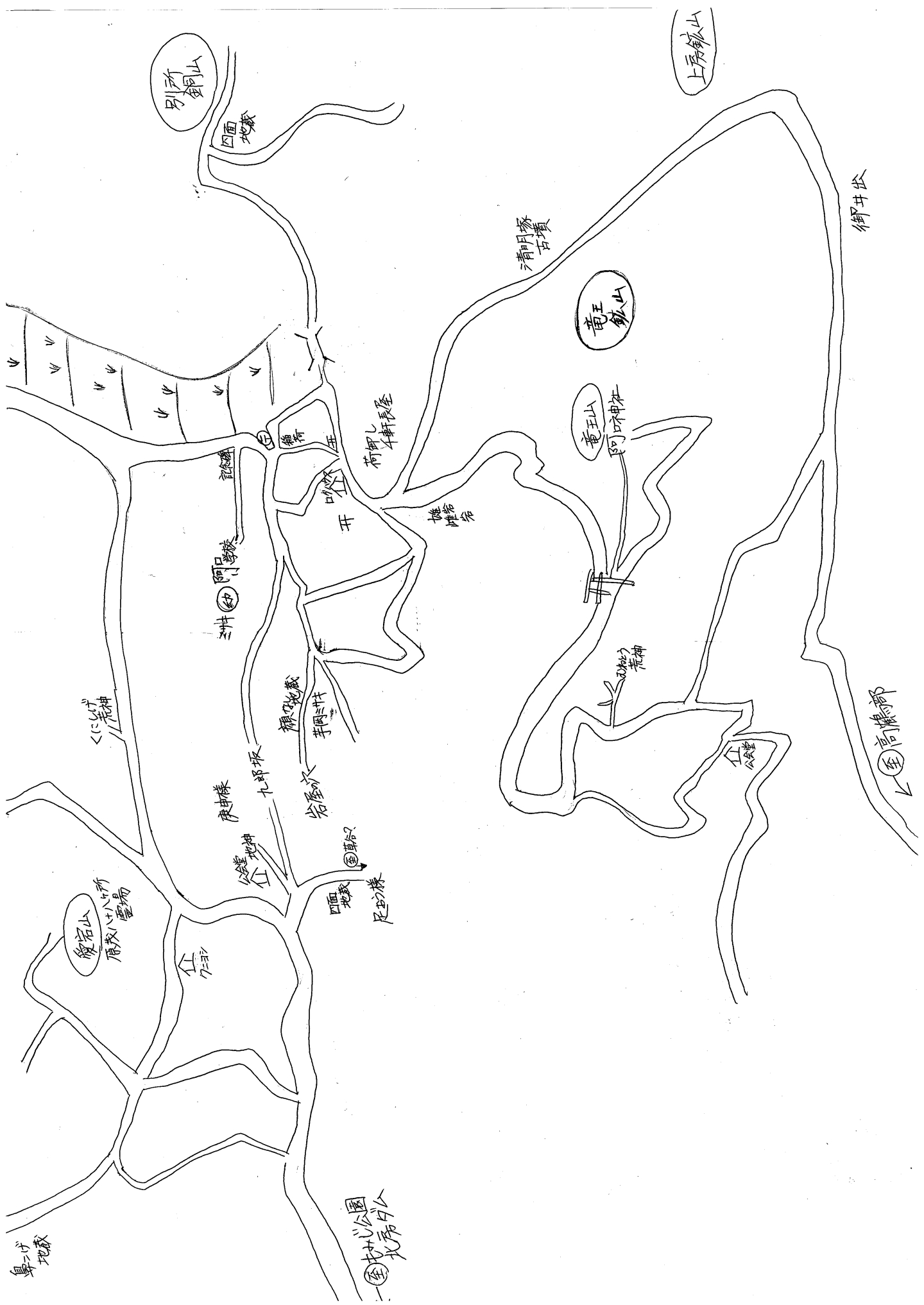
○原茂地区の遺産・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

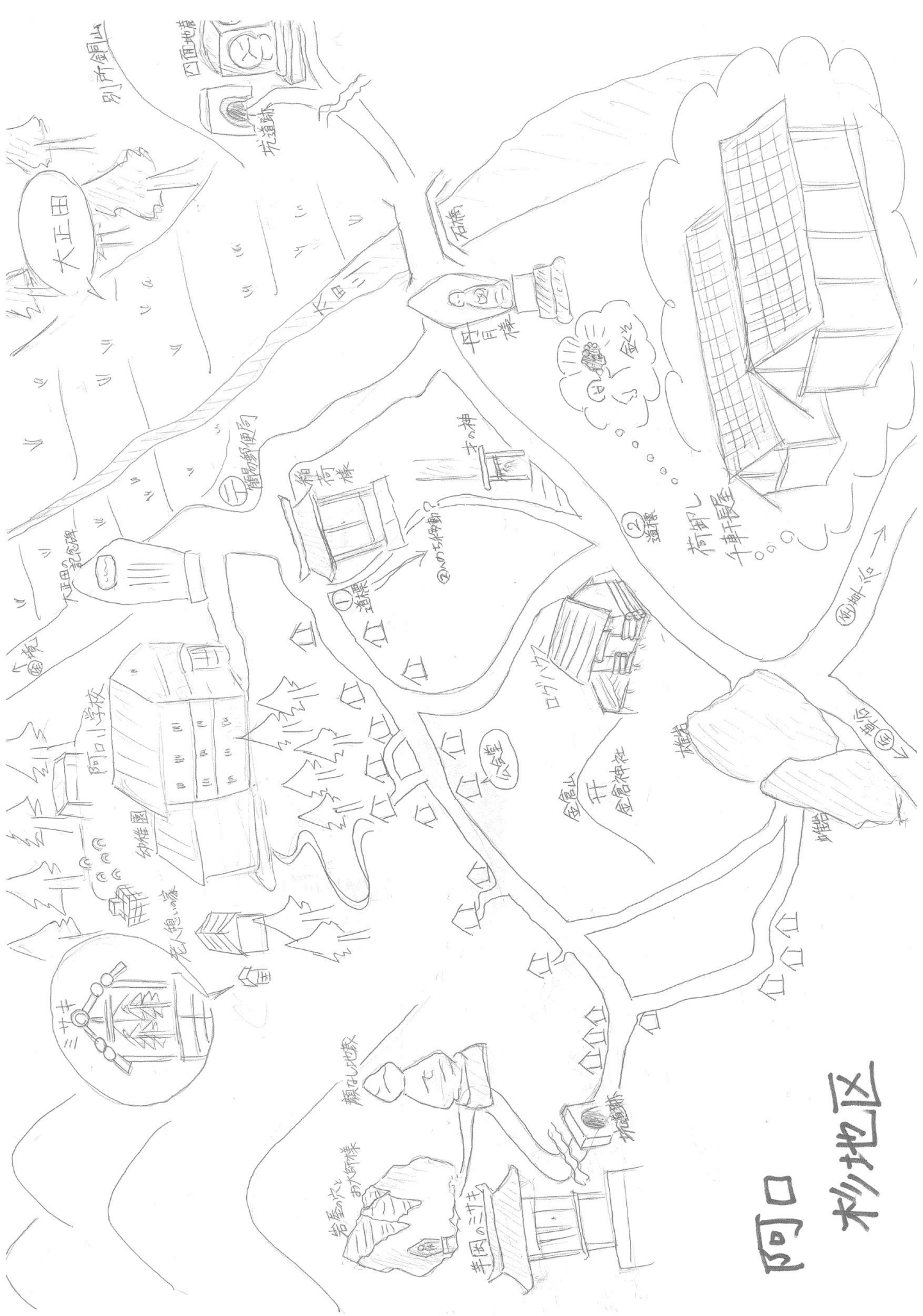
原茂八十八ヶ所霊場、塚本家に伝わる鏡、足おう様、庚申様、吉祥寺の御本尊、阿弥陀如来、鼻こげ地蔵、愛宕様、地神、岩屋の段の四面地蔵、刀工「国重」居住

○あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

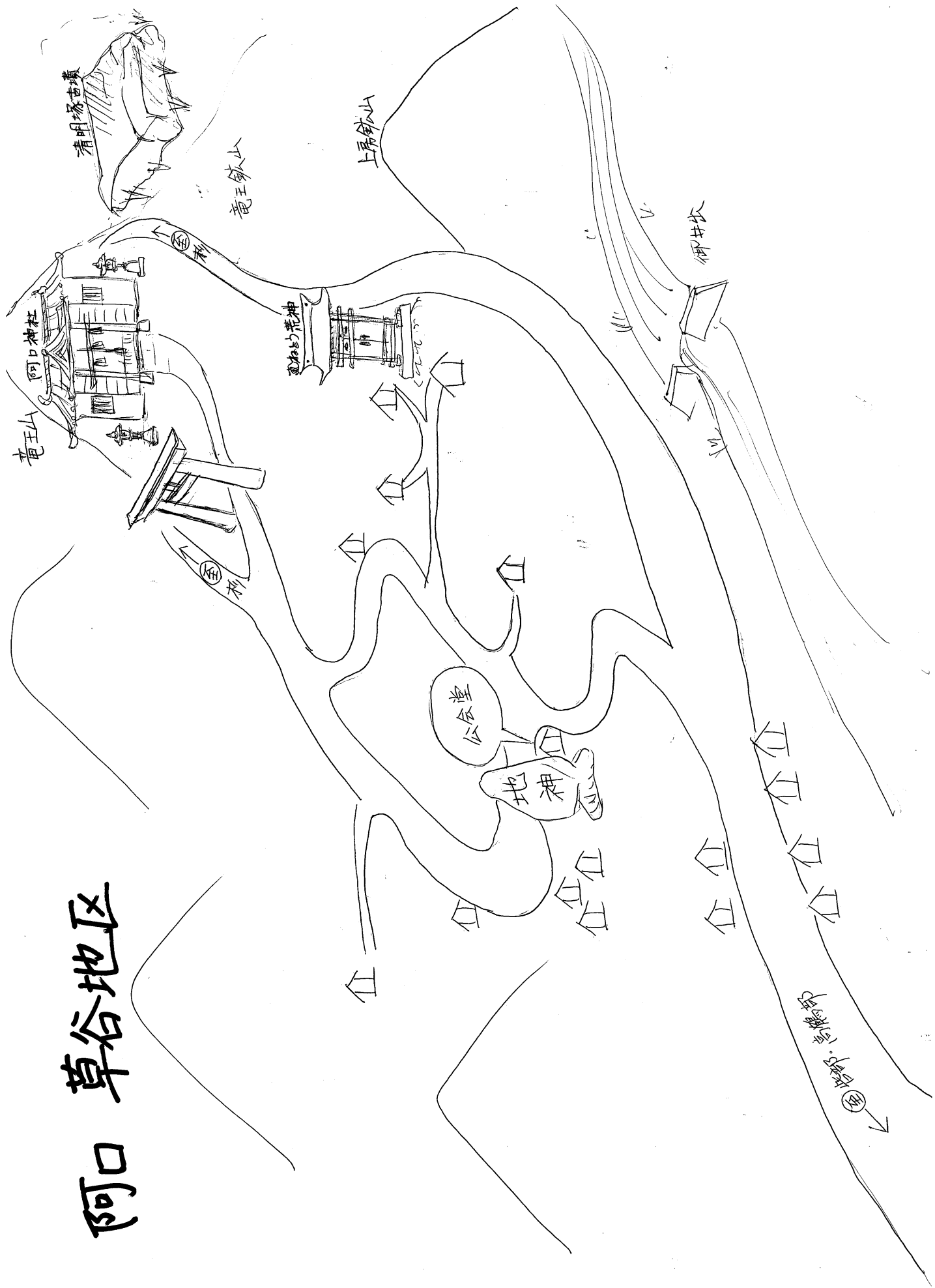
河口全体マップ







阿口 草谷地区



[illegible]

← 至 岩部・七ツ公園・北斎川

足跡様

算位

松

女郎坂

四

音の庄屋
屋号は7-33

AKH
1H

(NH)

鼻ニツ地蔵

10/10/10

原表 1 + 18 所

115

吉祥牙

庚申樣

也

真

／(ニ)しげ荒神

地名のおこり

阿口の地名のおこりは2説ある。

1つ目の説は、阿賀郡（あがのこおり）の口に由来するという説。

2つ目の説は、阿口村の地質に由来するという説。

阿口のほぼ中心にある竜王山には赤鉄鉱を産出する。今でもこの山を中心にいたるところに赤鉄鉱が地表に露出し、そのさびで山肌が赤く見えるところがある。阿口村は、この赤い地肌に含まれる鉄鉱石を求めて集まった製鉄集団によって開かれた村で「あかの地」→「あかち」→「あくち」と発音がなまって変化していったものという説である。

原茂に庄屋がおかれ、他に草谷村、境村、杉村がある。

杉地区

阿口小学校



校舎



校庭

明治維新により日本政府は欧米諸国と肩を並べるべく、あらゆる面で近代化政策をとってきた。教育もその改革の大きな柱として、明治5年（1872）、今までの寺子屋から欧米の教育制度に学び、全国的に学区制を敷き、強力に近代教育を進めた。

それに呼応して、阿口にも明治8年（1875）12月、境 薬王寺本堂脇室に「開明校」と称して作られ、当時の住職が岡山県から教員免許状を受け、教鞭をとった。途中、「阿口簡易小学校」と改称し、明治23年（1890）杉地区に校舎新築移転するまで当寺で授業が行わ

れていた。明治、大正、昭和、平成の4代にわたり、校名も幾たびか変わり、校舎や運動場も何度か改築拡張されてきた。在校生も最多のときは140名を超え、卒業生は地元はもとより全国各地で有為な人材として活躍。ただ、悲慘な大戦で戦死した卒業生も多数いることも忘れてはいけない。また、阿口小学校は阿口地区の文化の拠点として「阿口地区運動会」や「文化祭」も開いていた。

平成25年（2013）3月、児童数9名《6年2名、5年4名、4年1名、3年2名》となり、地域から惜しまれながらも「皆部小学校」に統合となり、「開明校」創立から137年の歴史の幕を閉じるに至った。



休校式典



校旗

阿口小学校校歌

校歌は、1964年（昭和39年）の阿口小学校の新校舎落成と共に制定された。

作詞は吉田那治、作曲は森豊幸である。

1.雲を呼ぶ 雲を呼ぶ
竜王山に雲が沸く
希望にはえて この若さ この力
理想の虹を美しく
かけよう 吾等 我等
阿口小学校

2.風光る 風光る
大正田の野も山も
やさしく抱く この生命 この思ひ
平和の花を香も高く
さかそう 吾等 我等
阿口小学校

3.大田川 大田川
休む時なく 夢の歌
歌うせせらぎ この校舎 この穴とせ
学びの道をまっしぐら
進もう 吾等 我等
阿口小学校



阿口小学校校歌の石碑



阿口小学校旧校舎

金倉神社



この山上に神社があった

竜王山の麓にある金倉山に、鉾山の繁栄を願って、明治43年までこの地に祀られていた。村の氏神様であった。杉地区には祭礼（阿口神社の秋祭り）の時に立てる「金倉大明神」と藍染の布に染め抜いた宝暦年代ののぼりが残されている。現在ののぼりは新調したものを立てている。

境内があり、その境内の中央には昭和30年代後半に地元の人の手で新しい石組の神輿代が造られ、現代も残っている。昭和の時代まで、秋にある阿口神社の祭礼の時の神輿巡行のおりには、この境内に神輿を担ぎ上げ境内を練り歩い

境内の周辺に金倉古墳があったと伝えられている。



杉の才の神は、作州に通じる道の峠にあって大きな赤松の大木の株元に祀ってある。仏像などの偶像物はない。現在、赤松は倒壊して跡形もない。昭和**40**年代ごろまでは、穴を開けた椀を吊り下げたり、小さな薪の束を供えたり、小さい紙の旗を願主の年の数だけ立

てたりしていた。正月には木の枝で箸を作り、才の神にお供えしていた。

杉部落全員がお祀りしていたものではなく、一部の家系や親戚筋がお祀りしている。

平成31年（2019）有志で鳥居と御札を新しく作った。

大正田



大正田（令和4年）



大正田（昭和62年）



大正田ができるまでの田のかたち

「記念碑」の読み解き



大正田の石碑前での写真

上房郡些部村阿口の地は山間にあり、太田川がその中心を貫流しており、その兩岸の田んぼは土地が低く湿地、深い湿田でありしばしば股まで沈んでいたため村民は難儀していた。

そこで、大正5年、阿口村の有志が集まって協議し官庁にも要請したうえで同年2月9日に「耕地整理組合」を設立。3月18日に起工した。以来、村民は心を一つにし、力を合わせて工事すること10年余り。用水路を通し、たまっている水を抜き、荒れた土地を拓き、畦道を整えてついに大正15年12月21日にすべての工事を完成させた。

工事費3万余円を費やし、良田29町歩5反余歩を得た。麦青々と稲は黄金色に豊かに広がっている様を見るとき、昔のあの苦労した農作業の思い出が消えてしまったように感激した。ああなんと素晴らしいことか。有志がこの工事

のことを記し後世に伝えたいと念願し、この碑を建立した。

昭和2年丁卯秋10月

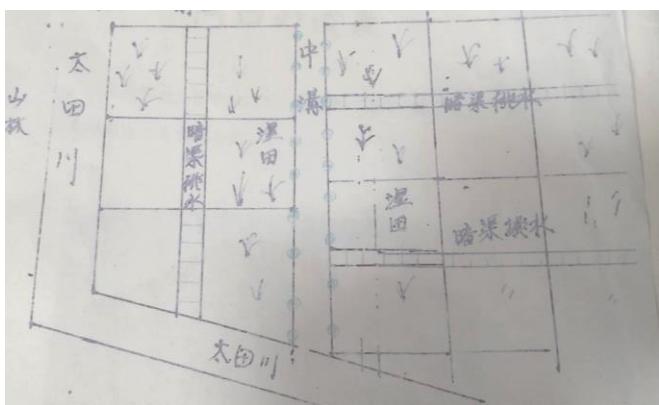
当時の金銭価値

米1俵の価格・・・約8円

大学卒業者の月給・・・約50～60円

職業婦人の月給・・・約30円

大正田の耕地整理



大正田の上からの図

暗渠排水とは？

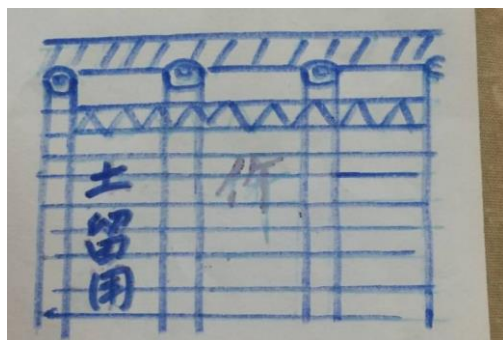
「暗渠（あんきょ）」とは、地下に埋設したりふたをしたりした水路のことを指している。これを活用し、土地の水はけを改善する手法を「暗渠排水」という。これは水田を乾田化するために取り入れる方法のひとつだった。



暗渠排水の横断面図



暗渠排水の縦断面図



中溝の横断面図



中溝の上からの図

中溝とは？

杭を打ち、竹で編んでいる溝。土留めと排水のどちらの機能もあった。

竜王山の鉱業



竜王鉱山の坑口

竜王山は、鉱物資源の豊かなところでその採掘の歴史もかなり古いと考えられる。かなづり跡や鉄滓が多くあることからそれが推測できる。新しいものでは昭和10年から昭和30年ごろまで銅山を操業していた。銅鉱の採掘が主であるが、古い時代は鉄の含有量の多い赤鉄鉱を採掘、ここで製錬したと思われる。ふもとの「清明塚」古墳のあたりで古代製錬の跡がみられる。

口伝によれば、昔、竜王山全盛期のときは因幡の国より多数の鉱夫がやってきて住んでいたのが「荷卸し」にあった「千軒長屋」であったという。



金くそ

荷卸し



現地写真

ここに各所の鉱山で採掘した鉱石を運んでおろし、「たたら」作業をしていたという。道路を舗装する前までは、金くそ（製鉄の際にできる鉄くず）がたくさん残っていた。

その他の鉱山並びに鉱山跡



竜王鉱山の出し山

「別所銅山」阿口及び美川村の境にあった。昭和30年頃まで採掘していた。他に「金山」「金尾名（かなむな）」「金ずり」「まかも」「いもおか」「岩屋の段」という地名や名称は鉱山と深くかわりがあった名残である。

杉、境地区は特に土の色が赤っぽく、鉄分が溶け出ていると思われる。

鉱山関連の言い伝え

口碑曰く、かつての阿口における鉱山全盛の時代には、木材鉱山の薪炭用に使われ、自家用の薪炭の不足を訴えたという。

また、因幡の国（現在の鳥取県）から多数の坑夫が行き来していたが、坑内にて思いがけない災禍に遭い6名が死亡した。よって、六地藏を彫刻して埋葬した。その妻子らがふるさとを恋しく思い、次の歌を詠んだという。

「ここで因幡の鳴る鐘聞けば、
因幡恋しや道遠や」

（『些部村誌』未載の口碑）

清明塚



清明塚古墳

竜王山ふもとにあり、横穴式石室を有する古墳を考えられている。副葬品として、須恵器の平瓶、須恵器のはそう、土器片、直刀破片が出土している。

セイメイ塚というのは全国各地

に存在するようである。平安時代の陰陽師である安倍晴明のゆかりを記念して建立したものであろう。民間の陰陽師が安倍晴明の人気にあやかって安倍晴明とのつながりを誇示するために建立したものとも言われている。（インターネットによる）

杉の「セイメイ塚」も同じものであろうが、それならば、「北房町史」にある「清明塚」とある「清」の字は「晴」の文字が正しいと思われる。



出土した平瓶
（北房ふるさとセンター所蔵）



出土したはそう



出土した土器片 ⑤表面、⑥裏面

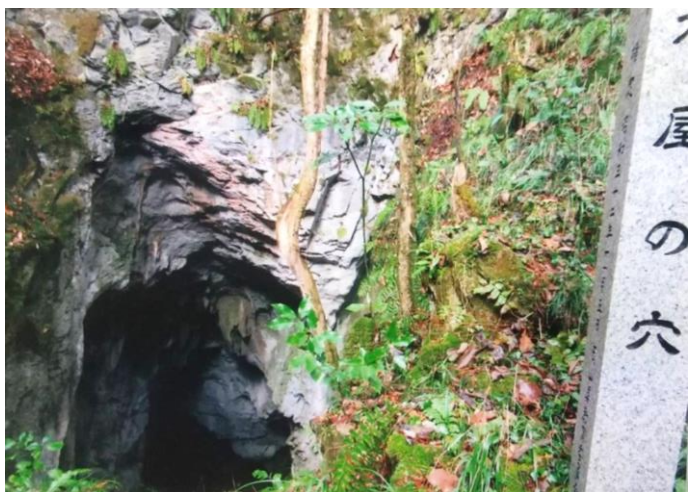


出土した土器片 ⑤表面、⑥裏面



出土した土器片
(北房ふるさとセンター所蔵)

岩屋の穴



岩屋の穴の入り口

石灰洞。3つの開口部を持つ支洞の多い吸い込み穴で、総延長1370m、高低差46mに達する。

阿口小学校校地から西南のドリーネの北側に竪穴状の洞窟がある。

町内には大小30に上る石灰洞窟があるが、最大最長、しかもコウモリなど洞窟生物の多い洞として貴重である。

昭和32年岡山県天然記念物として指定された。

現在は尋ねるものはいないが、昔は子供たちの遊び場であったり探検場所であったりした。

照明は設置されていないため、たいまつを燃やして中に入っていた。

「鬼の岩屋」とも言って、この穴に鬼がいるが、3月の節句には鬼が節句礼に行って留守になるからその日だけは穴に入ってもよいと言われていた。またヨシクニイヤともいわれ、昔、竜王山が火を噴いたときに庄屋の吉国（屋号）がその穴に入って助かったのでそう呼ぶ。

(『北房町史民俗編』より)

竜王山の方は黒ぼこで凝灰岩質や火山灰質の地帯があるため、火を噴いたこともあるのではないかとされている。

雄岩、雌岩

阿口神社竜王山の杉側のふもとにある2つの大きな岩。向いの大佐山から鬼が竜王山をめがけて投げた岩と言われ、大きい方を雄岩、小さい方を雌岩と言う。雌岩は「乳神様」ともいわれ、この岩に

亥の子まつり



雄岩



亥の子石



雌岩

乳の乏しい母親が立願すると、豊かな乳に恵まれると崇められてきた。かつては布で乳型が作られて供えてあった。

現在は、傍らの道路の拡張工事で雌岩は頑丈なコンクリートで支えられている。

また、ここから大佐山の方に向けて沈む夕日は絶景だとささやかれている。

旧暦10月の亥の日で、この日は田の神が帰られる日とし、収穫祭として祀られた。各地にあった祭りである。

杉の亥の子まつり（亥の子づき）は平成の終わりまでは子供たちが毎年行っていた。

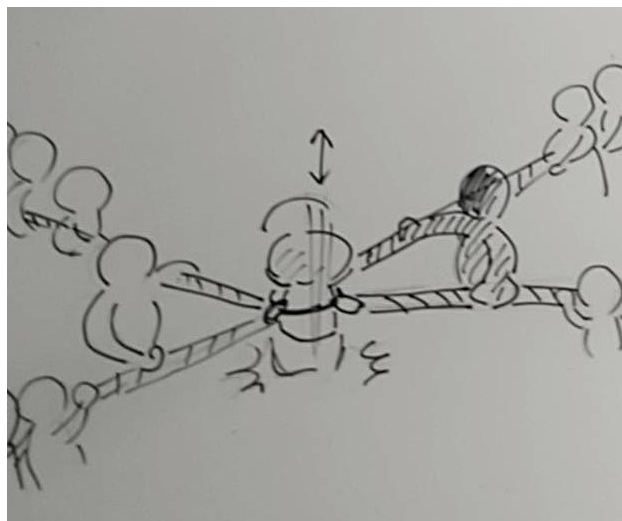
亥の子の日の1週間前から子供たちが準備を始める。山からカズラを4,5本取ってきて、亥の子石にくくり付け、弊を切る。亥の子の日の夕方、公会堂に集まった子供たちは弊を供えて「亥の子の神



子供たちが作る弊

を信ずるものは、お家も繁盛、五穀も上手（成就？）、ヨイサ、ヨイサ」と2,3回歌い亥の子石をついた後、子供たち全員で各戸をさっきのハヤシ言葉を大きな声ではやしながらついて歩く。各戸からは祝儀のお金をもらい、それと引き換えに子供たちが作った弊を渡す。もらった祝儀は後で計算し、参加者全員に配分する。現在はこの行事も姿を消した。

口伝によると、一斉に歌うハヤシ言葉は周辺地域並びに他県でも「亥の子のようさ。祝わぬものは、鬼産め蛇産め、角の生えた子産め、ドンサ、ドンサ」というものであったが、杉地区のハヤシ言葉は前述のものである。それは、かつて阿口小学校の職員住宅に泊っていた先生が当時ハヤシていた原形のハヤシ言葉を聞いて、祝いのお囃子言葉にふさわしくないと「亥の子の神を信ずるものは、お家も繁盛、五穀も上手（成就？）、ヨイサ、ヨイサ」と作詞され、以後、杉の子供たちだけは子のハヤシ言葉になったという。



亥の子づきの様子

昔は鉄の輪はなく、くびれた石だけであった。いつの時点からか付けられた。かつては石のくびれ部にカズラをかけてクモの巣のように四方に張っていた。

部落の各家を回ってこの動きを毎回していた。家々を回っているときに、お金やみかんやお菓子をもらっていた。家に着くまでは静かに声を出さずに行き、儀式になったら唐突に大きい声で歌って家の人にびっくりさせていた。終わったら金倉山のところの神輿台のところで山分けしていた。

阿口のどこでもしていた行事であったが、最後までしていたのは杉地区であった。基本的に小学生の役割としてしていた行事であったが、晩期頃は中学生も混ざって行っていた。

他地域の亥の子まつり



イヌノコ
(兵庫県立歴史博物館)

姫路市周辺の海岸部、および家島群島ではワラで作った作り物を神輿のようにして子供たちが練り回すということがみられ、この作り物もイヌノコと呼ばれていた。イヌノコは最後には大地にたたきつけられて壊されるが、それはもともとこの行事が、大地をわら束で叩いてその生命力を高め、豊作を願う意味を持った「亥の子搗き」であったことに由来する。

杉さくらの杜



会員が作ったログハウスと桜の名所予定地



ログハウスでのひととき



杉さくらの杜育てて観る会の会員

岡山県真庭市阿口の杉集落の裏手にある山はかつては頂上が神社となっており、人々の集まる場所

として利用されていた。しかしながら戦後に植林された山はうっそうとし、集落に影を落とすようになり、誰も寄り付かない山となってしまった。

そこで、昔ながらの人が集まる「場所」の再生を目的とし、地域の自治会員が中心となって「杉さくらの杜育てて観る会」が設立された。

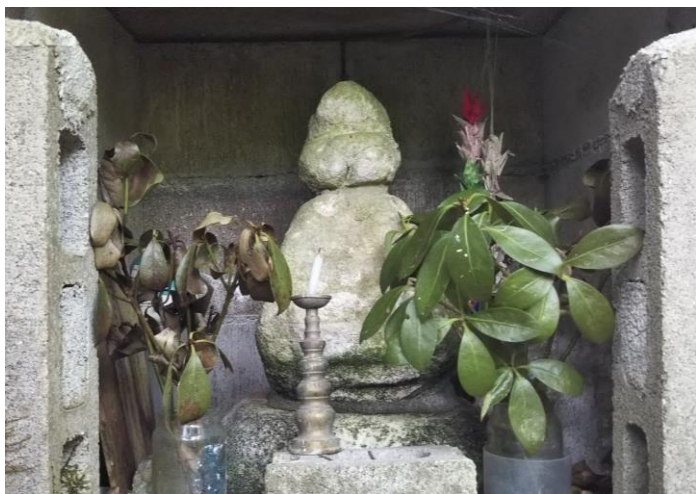
この周辺には醍醐桜や岩井畝の大ザクラがあり、すでに観光名所になっている。しかし、いずれも単木であり桜並木を歩くようなことはできない。そこで本会では、それらの道中にあたるこの場所に桜並木の中を歩けるような名所を作り、地域として桜の名所づくりに貢献し、一層この地域を盛り上げていきたいと考えている。

草刈りなどの維持管理などが大変で若い人が継いでくれるかが懸念されているが、自分たちが楽しんですることを第一の目的にもしている。



令和5年時点の桜の木

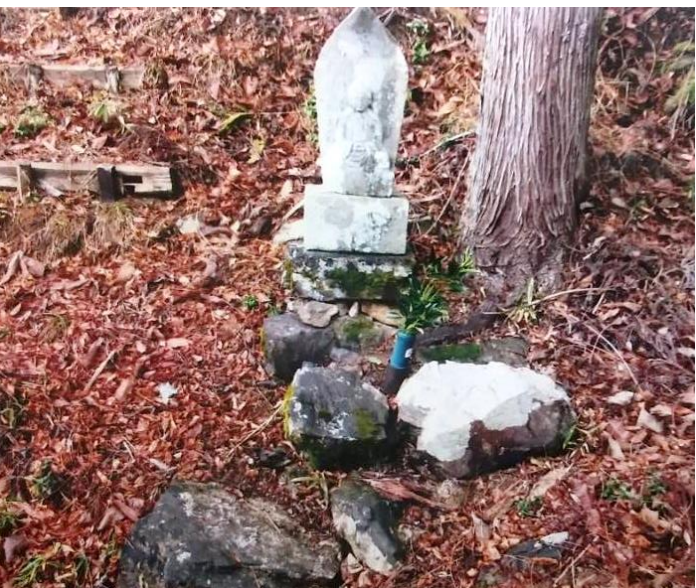
顔なし地蔵



原茂にあったお城が戦に負け、お姫様が逃げる途中に、薙刀を持ったままここから身を投げ、顔がつぶれてしまったので、顔なし地蔵が祀られたという古老の話がある。

祠のすぐ近くに10mくらいある岩壁があり、そこから身投げしたと思われる。

丹月様(丹月正人)



丹月様（たんげつさま）は丹月正人（たんげつしょうにん）というお坊さんのことを指している。

昔は、幅30cm、高さ1mの石碑と、横に丸形の石碑があったと言われているが現在はお地蔵さま（明治6年 黒田又一郎氏建立）が祀られており、お参りするとぜんそくなどにおかげがあるといわれている。

稲荷様



稲荷様の祠

杉の上のお堂の辺りから山道をしばらく登ると、お稲荷様の鳥居が見える。この稲荷は、明治時代にムラに赤痢が流行したときに、森嶋英次氏宅、森杉広氏宅、山田祥一氏宅の3軒で祀り始めたという。

2月の初午には3軒で宿を回して祭りを行っている。宮司を頼んで拝んでもらう。

（『阿口を訪ねて』より）

別所鉾山近くの四面地蔵

地神



四角柱の4つの面にそれぞれ地蔵が浮き彫りにされている。

岩屋の穴のお大師さま



岩屋の穴の入り口に祀られているお大師さま。かつては春と秋に、お大師巡りの人々がお参りに来ていた。青年会の人たちがお遍路さんを接待して、公会堂に泊めるなどの接待をした。

（『阿口を訪ねて』より）

杉地区では、お大師巡り自体はかなり前からやめていた。しかしお大師巡りの名残で、10年くらい前までは地区の人たちで集まってお大師様を拝み、料理を食べていた。

阿口の地神

地神は百姓の守り神で、阿口で地神信仰がされるようになったのは明治末から大正のこと。秋の社日にお神酒を供え、宮司に拝んでもらう。（『阿口を訪ねて』より）

芋岡のミサキ



祠の中の御神体は、銅の鏡。このミサキはかつて「備中国皆部住為家作」と銘の入った槍が供えられていた。現在でも2本の方なの雛型が供えられている。不憫な死に方をした人を先祖が祀ったのが始まりで、3月3日にはのぼりをあげ、宮司に拝んでもらう。以前には、ミサキの前で踊りをしたことがあったらしい。

(『阿口を訪ねて』より)

い、子供はこの坂に埋葬され墓もあるという古老の話。

旧阿口老人憩いの家 近くのミサキ



ミサキとは？

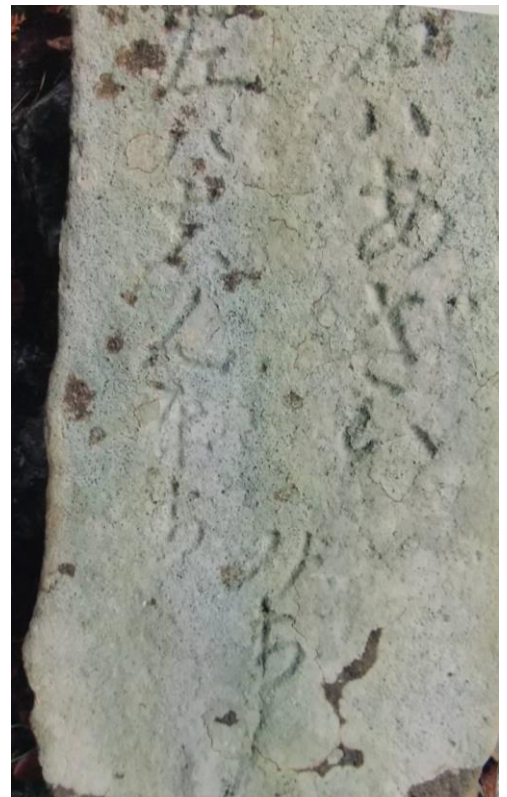
不慮の死を遂げた人を祀ったものを「ミサキ」という。霊力が非常に強い怨霊であり神様でもある。祠の市が悪ければ、人にとりつくこともあるという。また、特定の力を持つミサキもあり、病気の治癒や安産の御利益があるものもある。

九郎坂

昔、作州から備中に嫁いだ人が離縁して作州に戻り、今度は杉に嫁いだ。残された「九郎」という子供が、母恋しと会いに来る途中この坂で息絶えた。母は「私は嫁いだ身なのでここに埋葬するわけにいかない」と言



杉峠ノ堂の道標
(右ハあざい 左ハをちやい)



九郎坂の道標
(右ハあざい 左ハ志んまち)

境地区

高野山真言宗 「聚法山薬王寺」



薬王寺本堂

本尊 薬師如来
左手に薬壺（やっこ）を持ち、右手は施無畏（せむい）の印を示されている。これにより、恐れと不安を取り除いている。

脇士 愛染明王 聖観音

沿革（寺伝より）
大同2年（807）弘法大師開基
宝暦10年（1760）鐘楼建築、
梵鐘鑄造

明治8年12月 開明校と称し、
阿口小学校の全身を開校
明治32年 石段完成
昭和17年 梵鐘供出
昭和47年10月 梵鐘再鑄
昭和57年 本尊並びに脇士仏像
補修彩色替
平成23年 本堂改築

薬王寺（山号：聚法）は、高野山真言宗の寺で、開基は天平年間までさかのぼるという。

現在の住職で70代目以上であるはずだが、20数代目の住職であるとしている。それは記録上明らかな部分のみを勘定しているためであろう。

明治初期頃には、寺子屋として薬王寺が使われていたこともあり、阿口小学校の前身ともいえよう。戦後一時期には、義務教育を終えた女子に裁縫や作法を教える場所として提供されていたこともあり、薬王寺が幅広く役立っていたことを物語っている。

薬王寺の檀家は、阿口の大部分を占めるほどである。

薬王寺の鎮守様は牛頭天皇で、寺の裏にある。

境は石の少ないところで、（「のめ石」といわれる土の塊が多い）寺の石段を作る際には、阿口中の檀家の人が月田から1個1個石を担いできてくれたという美談が残っている。

（『阿口を訪ねて』より）

本堂はたびたび焼けており、詳しい資料はあまり残っていない状況である。

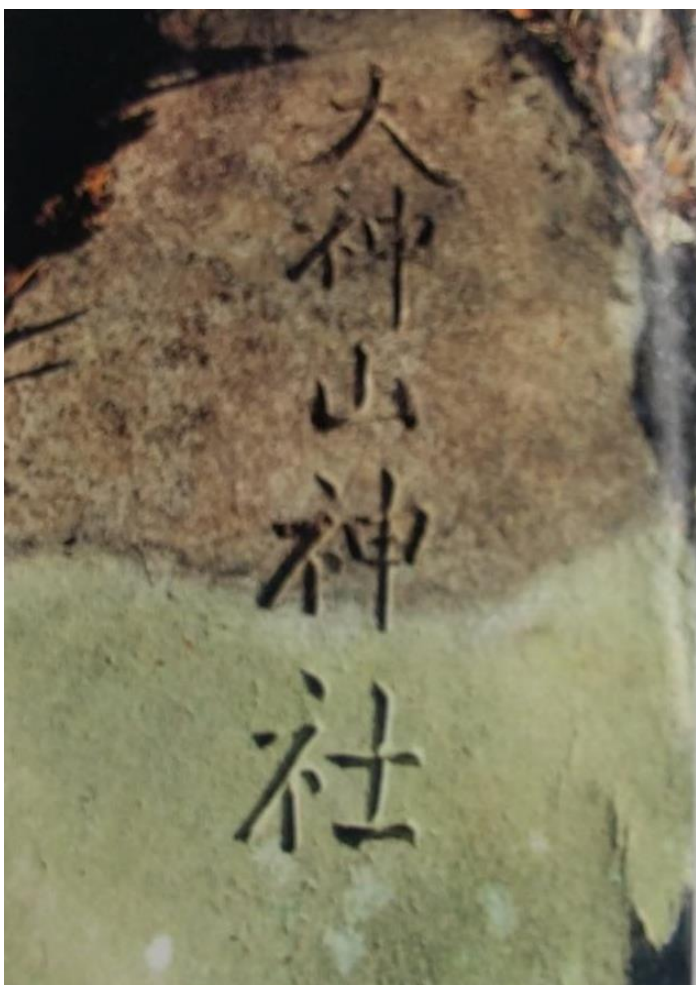


薬王寺の梵鐘



薬王寺の石段

大山様



大神山神社と刻まれた自然石

コビダナの大山山の頂上に「大神山神社」と刻まれた自然石が祀られている。『北房町史民俗編』

によると、これは伯耆大山（ほうきだいせん）の大神山神社奥宮を勧請したものであるらしい。境の人々は大山様を農作の神と考えている。すなわち、水を賜る神でもあり、農業に欠くことのできない牛にも関わりが深いという。

旧4月24日には大山様の祭りが行われていた。各戸から人が出て大山山に登り、「豊作になりますように」「大水が出ませんように」などと祈った。拝むのはたいてい先達だが、宮司を頼むこともあった。山の上で当番の家が用意したお神酒を皆で飲んだ。この日には各家家で田植えの準備をすることになっている。大山祭りは最近30年ほど行われていない。

（『阿口を訪ねて』より）

山上様



現地写真

旧4月8日は山上様の縁日で、先達が結願のため護摩を焚いてホラ貝を吹いたり、餅（おひら、おはま）を投げたりした。これを「四方固め」という。「四方固め」の餅を拾うと、子どもを授かるとか、「マンがいい（運がい

い) 」とかいう。山上様の縁日はたいそう賑わい、行商人の姿も見られた。先達が絶えた後は薬王寺の住職が餅投げをしていたが3～4年前から行われなくなった。

(『阿口を訪ねて』より)

のぶよし荒神



のりさだ荒神



こびたな荒神



阿口の荒神

阿口では、どの部落でも共通で、男子は子供が生まれて30日目、女子は33日目に荒神に参る。荒神様に部落の一員になったことを報告し、赤ん坊の名前を書いた命名の紙を社の前に貼るのである。その際、境では初穂袋のお米をまくという。また、赤飯なども供える。命名の紙は、阿口神社の氏神にも納めるが、本来は荒神にのみ納めるものであるらしい。正月に荒神に参るという例もあり、荒神は産土神に近い存在であるようだ。

牛の子が生まれた時にも、同じように荒神に参る。牛は欠くことができない家畜であったから、部落の一員ように大切にされたということでもあろうが、荒神は牛の守り神としても信仰されているようである。境では以前、旧暦の6月10日に「牛の子まつり」と呼ばれる荒神の夏祭りが行われていたほどである。

荒神は産土神、牛の守り神という二つの性格をあわせ持っているようである。これ以外にも、「部落の守り神として家内安全や豊作を祈る」さらに「荒神は百姓の神であり、豊作のときに参る」という話もある。

これらのことから、阿口の荒神は、産土神、部落神、作神、牛の守り神として信仰される複合的な神であるようだ。

(『阿口を訪ねて』より)

こびたな荒神横の観音様



庚申様



こびたな荒神横のミサキ



天皇様



草谷地区

阿口には古い時代から鉱産物の産出があり、その繁栄を願って「金山彦神」を金倉山に祀っていた。明治43年（1910）、この神社と愛宕神社、網掛神社などを合祀して新たな阿口神社とした。（『北房町史』より）

阿口神社



秋の鳥居と参道



阿口神社の本殿

文禄元年（1592）、この年は大干ばつだった。同年の6月に阿口村の庄屋、組頭、百姓代表などが同村で一番高い山である千平山（せんぺいざん、竜王山の別称）に登り雨乞い祈願したところ、霊驗著しくにわかに降水があった。そのため、竜王山に阿口村の大氏神として祀った。

阿口神社の祭りは、現在、正月・春・夏・秋・新嘗祭の計5回ある。中でも秋の10月にある祭りは盛大に執り行われる。

この阿口神社は頼んだ際には祈祷もしてくれる。

むねとう荒神



地神



高鶴部城に水を送った 御井出



昔はこのあたりから水をお城にひいていた。取水口が草谷にあった。

原茂地区

原茂八十八ヶ所霊場



お堂と石碑（手前に写っている石碑にいわれが刻まれている）



日野上の廣瀬さんが寄付した石仏

愛宕山の入り口から坂道を登ると、道に沿って点々と石仏が姿を現す。山を一回りするように八十八か所分の石仏が設置されている。明治の末期、子供を連れた一人

の尼さんが阿口に住み着いた。広島から来た小野智ショウ尼というその尼さんを、阿口の人「チミョウ」と呼んだ。チミョウさんは寄付を募って歩き、明治43年1月、愛宕山に四国八十八ヶ所の霊場を模した仏像を安置した。作州へも足を運んだのだろう。それぞれの仏像に刻まれた寄付者の名前には、勝山町、落合町の人のも含まれている。

チミョウさんが住んでいたのは、3畳ほどの大師堂だった。チミョウさんは阿口中を泊まり歩いていたが、晩年は原茂の人が小屋へ代わる代わる通って世話をした。チミョウさんは新見市富原に葬られている。

(『阿口を訪ねて』より)

足おう様

九郎坂の道標の「右ハあざい」方面に坂を上り、道が平たんになった所に石で囲まれた中に小さなお地蔵様の顔が見える。言われもどんな感じの表記なのかも不明だが、急な九郎坂を上り切り、さらに草谷に向けて上り坂が続くため、ここで足を休めたのではないだろうか？

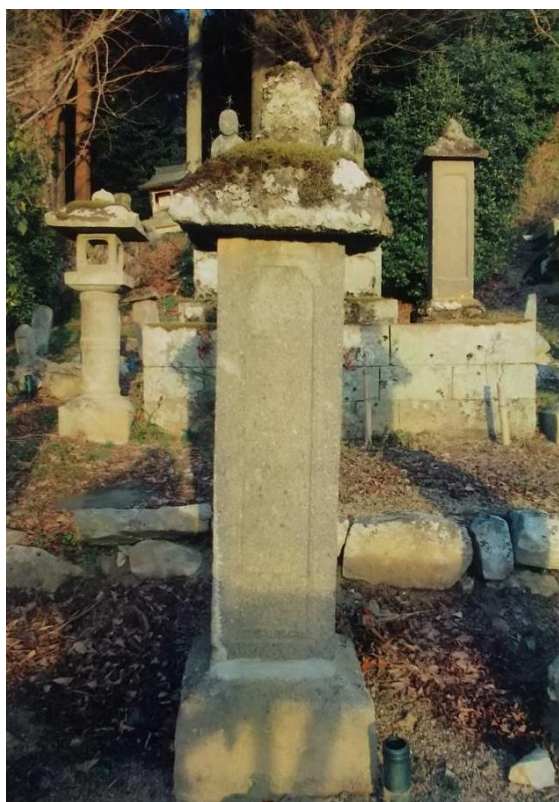


足おう様

塚本家に伝わる鏡



古墳がかつてあったといわれている。この鏡は手鏡型の和鏡で、梅などのデザインが施されている。



谷口俊二氏宅の先祖墓
延寶(1673年～)の元号が見える

庚申様



庚申様の祠



庚申様の仏像



足下の二鬼

原茂の山の中の中腹にある庚申は、三目六臂（さんもくろっぴ）の青面金剛像で足下に二鬼を踏み、左右に青衣の二童子を従えている。上々の作であって、鳥取の仏師が

作ったものだと言われている。

（『北房町史』より）

この庚申様は祠の中に祀られており、原茂の一部の人が管理している。

三目六臂とは？

3つの目と6つの腕を持っているということ。

仏像には、手や目、顔などの数が普通の人間よりも多いものが多い。それは、この世のものではない不思議な力を持っていることを表している。目や顔が複数ある場合は、その目や顔で世の中の困っている人のことを見逃さないという意味合いや悪者を絶対見逃がさないという意味合いなどがある。手が複数ある場合は、より多くの人を救う慈悲深さや万能さや力強さなどを表している。

吉祥寺のご本尊様



吉祥寺自体は現在廃寺になっており、御本尊は別の場所に移設されている。鳥取の住職が年に1回来られて拝んでいる。

阿弥陀如来



吉祥寺の隣のお堂に祀られている阿弥陀如来様。

鼻こげ地蔵



1メートルくらいの地蔵で、石に囲われている。

毛利・尼子の戦いで大山城が落城したときに、2人の落人を殺してしまったために祀ると伝えられる。もともと2つの地蔵があったので、「二つみ堂」と呼ばれていた。2つのうち片方の地蔵は富原の人が持って行ったので、この地には1体のみが祀られている。

この地には俗に「鼻こげ地蔵」とも呼ばれている。鼻がかけてく

ぼんだようになっているため、この名前が付いたのだろう。鼻がくぼんだ理由は、子供のいたずらだとか、鉾山関係の人が鼻の穴をつついて縁起を担いだとか、さまざまに伝わっている。

(『阿口を訪ねて』より)

愛宕様



愛宕（あたご）様を火の神として祀っている。

原茂は大正、昭和初期にしばしば火災に見舞われた。いったん、阿口神社に合祀して寄せ宮と呼んでいたが戦後三度火災にあったため、神社から原茂に戻して祀るようになった。昭和30年ごろまで、原茂の人は交代で、お札を持って毎日お参りしていた。また、高梁の愛宕様へは現在でも3軒ずつ当番でお参りして、頂いたお札を部落中に配っている。原茂に火事が多かった理由について、法印（お坊さん）は「愛宕様の社フロを切ったからだ」と言ったという。

旧7月24日は、愛宕様の縁日である。当番の3軒が23日の宵に部落中から集めた賽銭、薪を持って愛宕様を参り、祠の前でかがり火

をたいて夜ごもりをする。山の入り口から愛宕様を祀る頂上までの道のへりには、子供たちの文字や絵が描かれた灯籠が並べられる。昭和30年～50年ごろまでは、この宵に原茂の子供たち（小学校5,6年生～中学生）が安く仕入れた駄菓子などを灯籠の火の下で売っていた。愛宕様の夜ごもりは、子供たちにとっては楽しい夜であった。当時、原茂だけで50～60人いた子供は10数年でみるみる減り、子供の出店も今では姿を消している。

翌24日のまつりでは、午前9時ごろから宮司に拝んでもらう。

（『阿口を訪ねて』より）

地神



岩屋の段の四面地蔵



四角柱の4つの面にそれぞれ地蔵が浮き彫りにされている。

刀工「国重」住居

安土桃山時代、天正5年

（1577）ごろ左兵衛国重を頭領とした国重鍛冶が原茂に移住し、刀工の仕事をしていた。菅生、大井野、君山、布瀬には小規模な野だたらの遺構が多くあり、そこで作られた鉄は馬で原茂の地まで運ばれ、この地でたくさん作られた木炭とともに製鉄鍛刀に使われていたのであろう。

また、「かじや場」「炭がま」「国重」という地名（小字）が元禄検地帳見られるほか、「国重荒神社」という荒神様の社が残っていたり、「国重」という屋号の家が原茂には残っている。



くにしげ荒神

（国重刀工居住地内に祀られている荒神社で、国重という屋号を持つ森近家の上にある）

あとがき

『阿口の遺産』作成にあたり

境にある聚法山薬王寺は大同2年（807）に弘法大師が開基されたといわれており、それから1200年。阿口は小さな山村ですが、長い歴史と人々の営みが延々と続いてきました。

昭和30年代から日本も高度成長期に入り、生活様式、物の価値観、考え方などが大きく変化し人口流出、過疎化に歯止めがかからず空き家などが目立つようになってきました。昔、繁栄していた鉱業の遺跡や地名、習わしごとなどが人々の記憶から消え去ろうとしています。そこで本会では、これらの遺産を後世に伝えていこうと考え作成することにしました。

『阿口の遺産』は正確性を持たせるため『北房町史』や『阿口を訪ねて』（早稲田大学日本民俗学研究会）の記述、その他書物を引用し、また、地域の大勢の方のご協力をいただき、写真を中心に構成しております。ご協力をくださいました皆様大変ありがとうございました。とても十分とは言えませんが、この冊子が少しでもお役に立つならばありがたいです。

令和4年（2022）3月
杉さくらの杜育てて観る会

阿口の遺産

2023年7月 発行

著者：杉さくらの杜育てて観る会

編集：橘高七海